

京都府大生活科学
京都文教短大

村澤忠司
○ 中村博幸

[目的] 社会の情報化の波は、否応なく家庭生活の中にもが要とされ、その個育情の用報的ある。それに報我能的の結果、家庭における情報活動にも、質感敏速性、められ。とこらで、家庭分報境、(とおをも探な)の教育はあまり「日常生活」にない。現在の動向は、が能用し、度前と同様の教育には、それが対応できる情報教育家庭にみられる。したがお点けをる調査に詳た。情報の用報の具体的化調査と同様の結果は、家庭の形態や状況による差異がある。そこで人々の日常生活を行なうための学習活動は、京都上都市に用いては、求める情報に片寄りが見られる。

[方法] 1990年7月～8月にかけてのデ情報を用いて、一報に用いては、求め教育や家族の健康といふが主で、広告や新聞・テレビなどに、教育問題に分類して、学校で市よ能ととて、身近なこととして、学習指導の領用についての調査を行なう。それにも、子供の近いテレビやニューメディア、コンピュータといった情報機器から入手は少ない。それには、機器の使用や理解の困難さ、新しいことへの逃避といふ個入的な問題もある。従って、全般として、これらの新しい情報手段についての学習をすすめ、系統的な情報活用能力学習の工夫が求められる。